

# TOMIYA UNESCO NEWS LETTER

令和5年度 第1号 ユネスコ企画部発行 2023年5月



## 令和5年度 T-time 生徒課題研究発表会「持続可能な地域とまちづくり」

### 収穫祭

4月22日(土)に28回生収穫祭(課題研究発表会)が実施され、昨年度3月に  
行われた予選において28回生全60グループの代表となった14グループ  
が発表を行いました。「持続可能な地域とまちづくり」をテーマにした課題  
研究の成果を示す集大成の場となりました。今年度は、PTA 総会と同日  
開催となり、多くの保護者の皆様にもご来場いただきました。



生徒たちは、地域の抱える課題に対して、実際の行政組織に見立てた『仮想市役所』を高校内に立ち上げ、自分の部  
署の抱える課題に向き合いました。研究過程では、多くのデータを収集・分析しながら、様々な視点でアプローチして解  
決策を模索してきました。収穫祭では、どの班の発表も、現状の分析が丁寧になされ、根拠を明確に示した上で解決策  
が提案されていました。審査委員長の宮城大学食産業学群教授・高大連携推進室長の笠原紳先生をはじめとする7名  
の審査員の先生方を迎え、緊張感のあるプレゼンテーションとなりましたが、審査委員による質疑にも、しっかりと答える  
ことができていました。

審査員による審査の結果、以下の3つのグループが入賞しました。入賞者には賞状に加えて、富谷市長から富谷市の  
目指すゼロカーボンシティを目指したエコバック、エコマイボトル、カトラリーセット、クリアファイルなどの副賞も授与され  
ました。また、生徒と教職員による投票で特別賞が決定し、経済産業部 9 班が  
持続可能なまちづくり大賞とのダブル受賞をしました。

(表彰式の様子)



審査委員長の笠原先生からは、講評の中で「代表班の発表は、先行事例や  
先行研究を踏まえた解決策が述べられており、大変素晴らしい発表だった。今  
後も研究を続け、地域の課題に向き合い続けていってほしい」という講評をい  
ただきました。各代表グループのテーマと受賞班は裏面の通りです。



収穫祭を終えて…



# インタビュー



第1位～第3位の班員に  
インタビューしました！  
少しだけご紹介します

## ○収穫祭に出場しての感想

- 1位：発表には、いい緊張感で臨めた。練習の段階から自分のパートは30～40回ほど、プレゼンテーションの練習をし、会場全体に伝わるように工夫を重ねた。自分ひとりでは出来ないことも、チームで協力することで乗り越えられた。
- 2位：代表になって、自分たちが調べたことを、様々な人たちに知ってほしいと思った。実際につくった肥料を、審査委員の方に見せてプレゼンテーションを行ったり、仮説を立てたことを実際に検証したりして、解決策を工夫して示すことができた。
- 3位：内容は自信があったので、3位で悔しかった。まだ、やり足りない感じがしている。もっと突き詰めて研究したい。例えば、地域の課題に対して、今回は観光・歴史の観点から解決策を考えたが、他のアプローチから新しい解決策を考えてみたい。また、収穫祭で他の班の発表を聞いたことで、多くの発見があり、新しい着想が湧いた。最後まで粘って、納得のいくものができた。

## ○探究学習(課題研究)をする前とした後で、自分の変化はありましたか。

- 1位：発表前は、自分が分かったことをただ発表するものだと思っていたが、プレゼンテーションを準備する中で、どうやったらもっと上手く人に伝わるかという視点を持つようになった。相手に分かりやすいかどうかを考えて話すようになった。
- 2位：ものを捨てるときに、一度立ち止まって考えるようになった。日常生活で街に出るときも、過ぎにくい点は無いか、どうすればもっと良くなるだろうかなど、課題意識をもって歩くようになった。
- 3位：百聞は一見にしかずということを実感した。資料が残っておらず、フィールドワークに何回も行って、現地調査をしたり、ガイドを受けてみたりした。歩いて調査することで見えてきたことも多くあり、現地調査の意義を感じられた。また、課題研究をやったことで、富谷の歴史・宿場町の歴史を感じ、富谷市の魅力として発信できる場所がたくさんあるのだと発見する機会になった。

## ○後輩へのアドバイスを！！

- 1位：自分たちが楽しむことが大切。話し合うことも考えることも全て楽しんで行うことで良いものが出来ると思う。自分たちは、スライドの内容、伝え方についてはかなり話し合いを行い、その中で議論が深まるほど、結果が伴ってきて、さらに良くなっていきます楽しかった。時には皆で4時間以上話すこともあった。前向きな検討ができるのもっと良いものにしようという意欲がわいてきた。
- 2位：テーマを設定する時には、興味のある分野を選ぶと良い。自分をもっと知りたいと思うことを突き詰めて行くことで内容が深まった。また、発表の仕方に自信がなかったが、研究内容を深めることで、2位になることが出来た。
- 3位：何事も早く進めた方が良い。時間の余裕が生まれ、もっと良くしたいという点が見えてきて、修正部分がどんどん出てくる。放課後に集まり、班で修正を加えたことに、他の人からどんどんアドバイスをもらって、全ての人にプレゼン内容が伝わるよう、工夫するといい。

## 最終順位一覧

順位	研究テーマ	班	関連部署
1位 特別賞	富谷市の知名度UP政策	E-9	経済産業部
2	家庭内と富谷高校内の食品ロスを減らそう!!	C-3	市民生活部
3	魅力的な歴史で「何度も行きたくなる町，富谷」を目指すには	E-1	経済産業部

## 代表班テーマ一覧

研究テーマ	班	関連部署
富谷市の公共交通を利用してもらうには?	A-3	企画部
偏見で富谷市に貢献?!～正しく使おうunconscious bias～	B-3	総務部
富谷市のリサイクルを促進する～混ぜればゴミ，分ければ資源～	C-5	市民生活部
魅力的な歴史で「何度も行きたくなる町，富谷」を目指すには	E-1	経済産業部
全世代が楽しく健康な体を作るためには	D-10	保健福祉部
ゼロカーボンシティ	A-8	企画部
スポーツイベントを通して富谷市のスポーツ状況の活性化を目指そう!	G-2	教育部
Don't be shy. Let's think positively!! 生徒中心の授業を目指して	G-7	教育部
富谷市に来る理由作り	E-6	経済産業部
家庭内と富谷高校内の食品ロスを減らそう!!	C-3	市民生活部
パンフレットで知名度アップ!～「スイーツまち」富谷を広めよう～	E-13	経済産業部
明石台から始まる公園中心の街づくり	F-4	建設部
富谷市の知名度UP政策	E-9	経済産業部
親が共働きの小学生の豊かな発達を目指してできることは?～大人との触れ合いや体験を増やす～	D-3	保健福祉部

**実りのある収穫祭となりました。3年生の皆さん、お疲れ様でした!**

# 収穫祭本選を終えて(田渕校長先生との対談)

## ～収穫祭後日談～

収穫祭において「Don't be shy. Let's think positively!! 生徒中心の授業を目指して」というテーマで発表を行った教育部7班が発表内容に関する意見交換のため、4月27日(木)に校長室を訪問しました。

教育部7班は、2年次の授業の際、ALTの先生から「もっと積極的になりましょう」と言われたことをきっかけに、自分たちの授業の受け方に課題意識を抱き、授業のあり方について研究を深めてきました。校長先生との対談では、収穫祭での研究発表をもとに、特に授業内におけるグループワークのあり方について意見を交わしました。校長先生と積極的に意見を交わすことができ、研究を一層深める契機となりました。

課題研究は、身近なところから疑問を感じた点について、「どうすればもっとよくなるだろうか」と課題意識を持つことから始まります。1・2年生の皆さんも、それぞれ、日常の課題に目をつけて、取り組んでみてください。



## ～28回生探究学習(課題研究)アンケートより～

Q 探究活動(課題研究)をやって、よかったことは何ですか。自由に書いてください。(一部抜粋)

- ・グループワークを行う上で、自分に何が足りないのかを知ることができた。
- ・富谷市がもっと好きになって、自分でもこんな町にしたいという願望が生まれた。
- ・沢山の人の前でプレゼンをすることで、自分に自信がついた。
- ・検討中ではあるが自分たちが出した対策法が富谷市に取り入れられたこと。
- ・自分たちの住んでいる地域(富谷市)を今まで以上に知ることができたこと。
- ・探究活動を経て、地域課題について深く知れたと思う。集団での活動だったため、以前より主体性が身についた。
- ・新たな視点から社会を捉えることができた。
- ・複数人で何かを完成させるのは簡単では無いことを学んで、それぞれの対処法などを考えられたことが自分にとってプラスになった。
- ・地域の課題を見つけ、将来の夢に結びつけることができた。
- ・相手にどうしたら伝わるかなど考えることで、自分の中の語彙や表現の仕方が増えたと思う。
- ・聞き手に興味を持ってもらえるようなプレゼンをする方法がわかった。
- ・富谷市の活性化というのは以前なら考えもしなかったもので、課題研究をしたことで富谷市のことをたくさん知ることができたし課題も見つけることができ、もっといい街にしたいなという気持ちになることができた。
- ・富谷市の課題に気づいたことで課題点を見る目が養われ、他の地域の取り組みや、富谷市で応用できそうな取り組みにも関心が向くようになった。